

# 中学校学習指導要領における剣道の記載内容に関する一考察

島田大輝（信州大学）

〔はじめに〕

学習指導要領（以下指導要領）は授業内容を規定する非常に重要なものである。剣道は昭和 33 年に指導要領（以下指導要領）の中に初めて登場し、以来学校剣道の指導はこれに基づいて行われてきた。

本研究では、まず学校教育における剣道の歴史を明らかにするとともに、これまでの指導要領における剣道の記載内容の変遷と明らかにする。また、剣道書における指導に関する記述内容の検討と筆者の経験を基にしながら、現行指導要領における剣道の記載内容の問題点とその課題を明確にし、合理的・効果的な指導順序・指導内容について検討する。

〔本論の概要〕

戦後昭和 33 年に指導要領中に剣道が登場し、それ以来学校現場では剣道の授業が行われてきた。また、指導要領の改訂は約 10 年周期で行われており、昭和 44 年、52 年、平成元年、10 年、20 年、30 年と 6 回の改定を経て現在の形に至る。

昭和 33 年、昭和 44 年の指導要領では、従来の剣道書に記載があった打ち落とし技など現在ではほとんど見かけない技も取り上げられている。指導の方向性としては、目標をもって行動し、練習を行っていくというように、剣道を通した人間形成を目的とする授業が目指されている。

昭和 52 年、平成元年の指導要領では、それまでの指導要領中に記載されていた具体的な技名や礼法等の名称が一切登場せず、具体的な指導方法も記されていない。これは以前までの厳しいカリキュラムによって授業についていけない「落ちこぼれ」が多く発生してしまい、それを防ぐべきだという世間の関心の高まりをうけて「ゆとり教育」が開始されたことによるものである。またこの時期は以前の間人間形成を目的とした体育から、運動を楽しむ体育へシフトする、「運動による教育」から「運動の教育」への転換点といえることができる。

平成 10 年から平成 30 年の指導要領では、これまでと同じく本文中に技名や礼法等の名称は書かれていないが、平成 10 年に指導要領解説が登場し、その中に技名や指導方法が詳しく記載されるようになった。記載されている技は現代の試合で決まり技として使用される技が多い。また近年の傾向としては、試合を通じて剣道の良さに気づき、生涯スポーツとして剣道を楽しめるようにすることが目指されてお

り、どのように練習に取り組むかなどの態度面よりも約束稽古や試合の中でどれだけ上手く技が出せたかといった技術面に重きが置かれている。

また、剣道の技能の構成は、昭和 33 年から平成元年まで基本動作と応用技能（昭和 44 年から対人的技能）に分けられていたが、平成 10 年の指導要領解説から基本動作と基本となる技に分けられるようになり、現行の指導要領に至っている。

次に、一般の剣道書の中に記載されている内容（技や指導内容、指導順序）と現行指導要領とを比較すると、そこにはいろいろな点で違いがある。剣道書に書かれているのが、長い間の経験から合理性があると判断された内容や指導順序であるとすれば、それと異なる指導要領中の記載内容にはいくつかの問題があると考えられる。ここでは指導要領の大きな問題点として次の 3 点を指摘しておきたい。

- ①基本の打突の仕方が基本動作とされ、しかけ技の基本となる技には面打ちが含まれないこと。
- ②剣道の技術習得において不可欠である素振りや踏み込み足などについて全く言及がない。
- ③試合の実施に不可欠である剣道の試合規則（一本の基準や反則等）について記載がない。

指導要領ではしかけ技の基本となる技は面 - 面などの二段の技とされているが、この技は面打ちの応用技であることから、基本となる技としてはまず面打ちを取り上げるべきであろう。また、剣道の技術を教える場合、素振りや踏み込み足は極めて重要である。その意味で、指導要領中にこれらの語が全く見られないのは大きな問題である。さらに、指導要領では技を仕掛け合う楽しさを強調しているが、剣道は一本を目指して行うものであり、また闘争形態のスポーツであることから、試合規則（一本の基準や反則）の理解は試合を行う上で不可欠である。

このように、指導要領の剣道に関する記載内容にはいろいろな問題があり、これらについては改善の必要性がある。その点を踏まえながら、今後剣道の指導方法が工夫・改善されていくことが望まれる。

〔おわりに〕

今回の研究を通じて指導要領の変遷やその指導について検討を行い、さまざまな新しい知見を得ることができた。今後教育に関わっていこうと考える者としては、この経験を生かして剣道の効率的な指導方法についてさらに考えを深めていきたい。

